駅弁のDNA

函館市医師会

水関（みずせき）　清（きよし）

駅弁にまつわるメモリアル・デーとして、４月10日と７月16日のふたつが知られている。

４月10日は、日本鉄道構内営業中央会が1993（平成５）年に定めた「駅弁の日」。その由来は、「弁当」の「とう」から数字の10を取り、「４」と「十」を組み合わせると「弁」という字に見えるから、とされている。７月16日の「駅弁記念日」は、国土交通省が2001（平成13）年に制定したもので、1885（明治18）年のこの日に、日本鉄道第二区線の宇都宮駅で日本初の駅弁が販売されたことにちなむ。また、1999（平成11）年のこの日に国土交通省設置法が交布されたため、同省が発足した2001（平成13）から、７月16日は「国土交通Day」として記念されている。

宇都宮で旅館を営んでいた白木屋の斉藤嘉平が売り出した、わが国で初の駅弁は、ごま塩をまぶした梅干し入りのおにぎり２個と沢庵２切れを竹の皮に包んだもので、価格５銭であったという。

その後、1889（明治22）年に姫路駅で登場した駅弁は、鯛の塩焼き・伊達巻き・焼き蒲鉾・出汁巻き卵・大豆昆布佃煮・栗きんとん・牛蒡煮つけ・甘炊きゆり根・薄味の蕗煮・奈良漬と梅干し・黒ごまをふった白飯からなり、今の「幕の内弁当」の原型が見てとれる。

一方、駅弁になくてはならぬお茶が販売されたのは明治20年代のこと。静岡駅の駅弁屋が信楽焼の土瓶にお茶を入れ、小さな湯のみを添えて販売したのが始まりとされている。

国鉄からJRが発足した当時、東海道新幹線の「こだま」が停車する各駅で駅弁を販売する業者に、販売価格900円の新作駅弁を競わせたことがある。「新幹線グルメ」と名づけた駅弁キャンペーンがそれである。

東海道新幹線（東京駅～新大阪駅）区間において、当時は「ひかり」に比べて利用が低迷していた「こだま」活性化プランの一環として、東京駅を除く停車駅12駅で、1987（昭和62）年11月20日、名古屋駅の２社を含む13社の調製元から新作駅弁が一斉に発売され、各停車駅と「こだま」車内で購入可能であった。

新横浜駅の「The横濱辨當」からはじまって、小田原駅「デラックス鯛めし」、熱海駅「早咲きの梅」、三島駅「天城の本わさびづくし海ひこ山ひこ」、静岡駅「茶めし弁当静岡めぐり」、浜松駅「喧嘩凧」、豊橋駅「手筒花火」、名古屋駅の「那古野づくし」と「トッピング・オムズ」、岐阜羽島駅「きのこ村」、米原駅「湖北のおはなし」、京都駅「精進弁当」、そして新大阪駅「御堂筋弁当」までの13駅弁である。このうち2024年まで、「喧嘩凧」「手筒花火」「湖北のおはなし」の３駅弁が残っていたが、2025年になって、「湖北のおはなし」を販売する井筒屋が、宮川亜子代表取締役名で「駅弁事業からの撤退の社告」をホームページ上に掲載したことで、駅弁ファンの間には衝撃が走った。以下に、その要旨を示す。

「弊社は安政元年（1854年）、長浜船着き場前にて旅籠「井筒屋」を創業し、明治22年、東海道線全通を見越し、交通の要衝となるべく米原へと拠点を移し、駅弁事業を営んでまいりました。旅のお供であるべき駅弁とは何か、その土地ならではの駅弁とはどういったものかを思い巡らせ「味をえらび　味をととのえ　味ひとすじに」納得いただける商品をお届けしたいと、日々励んでまいりました。しかしながら、昨今の食文化は娯楽化がもてはやされ、（中略）手抜えの文化も影を潜めつつあります。そのような環境に井筒屋のDNAを受け継いだ駅弁を残すべきではないと判断致しました。（以下、略）」

「井筒屋のDNA」とは、「味をえらび　味をととのえ」る「手抜えの文化」を意味するものであり、その実践例として販売したのが「湖北のおはなし」という名物駅弁であったろうことは、「新幹線グルメ」と名づけた13駅弁の中で残った３駅弁の一角を占めていたことからも明らかである。

筆者も、米原駅でこの駅弁を求めた一人である。竹すだれの容器に、地元名産である「鴨のロースト」を始めとする郷土料理が収められている。目を引くのは「おこんだて」という名の「お品書き」。以下に抄出する。

「賤ヶ岳の裾野を流れる小川の水が温む頃、琵琶湖から、いし貝、川えび、小鮎が水揚げされます。

このお弁当は、粒胡椒でローストした「鴨」が主役。大切な脇役には、すき焼き風にして胡麻をまぶした「かしわ」、甘辛く田舎風に炊き込んだ永源寺「蒟蒻」、卵焼き、葱とお揚げの「ぬた」、十五夜の味「小芋丸煮」、梅干しと山牛蒡の漬物、秋から冬にかけて、竹竿に干す「赤かぶら」。いずれも、滋賀の里の風物詩です。「白おこわ」は、下に敷いた桜の葉と一緒にお召し上がり下さい」

音もなく移ろいゆく四季ならではというコンセプトに沿った「白おこわ」には、山菜、枝豆、栗、黒豆が取り合されるために、筆者が購入したものは、冬バージョンの黒豆ご飯であった。

「お口直しには飴をどうぞ」として、中に醤油飴を入れて弁当箱の一角に置かれた「紙製のサイコロ」の目は『五』である。この「五の目のサイコロ」については、ドリアン・T・助川　著「駅弁ファナティック」（学陽書房　2001年）に優れた考察があるので、以下に抄出したい。

「米原で買った駅弁にはサイコロが付いていて／それは六がなく　一から五までのサイコロなのだけれど／それで十分だと思った／六は稼ぎ過ぎだからだ」

「すごろくは上がるに越したことはないが／／三つ進んで一つ下がり／四つ進んで一回休み／／もしもこのあやふやな日々がすごろくであるのなら／六を出してはいけない／出し抜いた気持になってはいけない」

「湖北のおはなし／このおはなしは老婆が幼子に与える知恵の物語だ／／知恵とはそういうもので／一人先を急ぐ知恵のことではない／旅人のおはなしはサイコロの先だ／それがどんなおはなしになったとしても／旅を続けることはできる」